

狐女房に見る異界 —二人の葛の葉が出会うこと—

加藤 敦子*

一 狐女房 信田妻伝説

狐が人間の妻となる、いわゆる「狐女房」の伝説は様々な形で伝わるが、和泉国信太の森に棲む狐の民話は「信田（信太）妻」として広く流布した。中でも葛の葉姫の姿を借りた狐葛の葉の物語がよく知られている。

最初に、狐女房の代表的存在である「葛の葉」について確認しておこう。

生命を救われた恩返しに、白狐が人の姿になって安倍保名の妻となる。これが葛の葉で、やがて童子をもうける。ある日、本物の葛の葉姫が訪れたため、狐は正体を現して去らねばならない。いわゆる「子別れ」の悲劇のヒロインである。この童子が成人して陰陽師安倍晴明になるという設定。竹田出雲作の浄瑠璃『蘆屋道満大内鑑』（一七三四初演）の二段目、四段目にこの物語が仕組まれている。古浄瑠璃の『信田妻』をもとに創作されているが、広く大和地方に伝わっていた異類婚姻譚の民話を背景としているのはもちろんである。（中略）人形浄瑠璃や歌舞伎では「恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信田の森の恨み葛の葉」の歌を障子に口書きや裏文字で曲書きするほか、変幻自在な出没を見せるケレンの演出によって名高い。[服部 幸雄]⁽¹⁾

ここでも挙げられているように、葛の葉をヒロインとする信田妻伝説を素材とした作品で最も名高いのは人形浄瑠璃『蘆屋道満大内鑑』である。

上記記事と重なる部分もあるが、この作品の概要を『歌舞伎事典』から抄出する。

人形浄瑠璃。時代物。五段。竹田出雲作。享保一九（1734）年一〇月大坂・竹本座初演。異類婚姻譚として著名な信田妻の伝承は一七世紀後半からしばしば人形浄瑠璃や歌舞伎に取り上げられていたが、本作はそれらを集大成した作品。秘伝書《金烏玉兎集》をめぐる安倍保名と蘆屋道満との対立を主筋とし、保名に助けられた白狐が許嫁葛の葉姫の姿を借りて契りを交わし一子を儲けるという安倍晴明の出生譚を絡めたもの。竹本大和掾の風を伝える四段目口の〈葛の葉子別れの段〉がもっぱら上演されてきた。自分の正体を知られた狐葛の葉が障子に歌を書き残して信田の森に帰って行く際の悲痛なクドキが哀れを感じさせ、人々の涙を誘う場面となっている。（後略）[原 道生]⁽²⁾

本作の人形浄瑠璃初演は享保十九年十月であるが、翌二十年二月には京都中村富十郎座で歌舞伎化されており、初演当時から好評を得た作であったことが分かる。陰陽師間の勢力争いである安倍保名と蘆屋道満の対立を主筋とする物語でありながら、それまでの信田妻伝説を巧みに取り込み、近世の浄瑠璃の普遍的テーマである子別れの悲劇を見どころ聴きどころとしたことが高く評価され、現在でも人気の演目となっている。

一方、本作について折口信夫は早く次のような指摘をしている。

信太妻伝説は「大内鑑」が出ると共に、ぴっ

* 都留文科大教授

たり固定して、それ以後語られる話は、伝説の戯曲化せられた大内鑑を基礎にしてゐるのである。⁽³⁾

『芦屋道満大内鑑』が主筋に絡めた狐葛の葉の物語が従来の信田妻伝説を集大成していたために、信田妻伝説の決定版としての地位を得て、信田妻伝説の原話的存在となったという指摘である。

本稿では、信田妻の伝説、また広く狐女房の伝説を「異界」との交流という視点から改めて捉え直してゐることを目的とする。狐の世界と人の世界が交わるとき、それはどのように描かれるのだろうか。

二 『信田森女占』

信田妻伝説の集大成とされる『芦屋道満大内鑑』以前にはどのような狐女房の物語が成立していたのか。『芦屋道満大内鑑』に先立つこと三十年、正徳三年（1713）に大坂豊竹座で初演された紀海音作の人形浄瑠璃『信田森女占』を見てみたい。

『信田森女占』の梗概を安名と葛の葉の関係を中心に記す。

陰陽師安倍家の嫡子安名は父の死を契機に出奔し、偶然出会った葛の葉と夫婦になる。百歳の狐の生肝を狙う悪右衛門が葛の葉の両親の館に踏み込み、母と腰元たちは野干の姿を顕す。安名は悪右衛門と切り結び、危ういところを大男に救われる。葛の葉は安名との間に子供をもうけ、世渡りに占いをしている。安名の妹あやめの前に出会い、蘆屋道満と占いの対決をする。葛の葉は勝利するが、鼠の油揚げに心ひかれ、狐の本性を出してしまう。葛の葉は子供と別れる決意をして、和歌を詠み、姿を消す。安名は童子を連れて葛の葉を探し、葛の葉から竜宮の秘符と名玉を受け取る。道満が安名を襲撃するが、安名は返り討ちにする。

この作品は、信田妻の伝承だけでなく、狐に関する説話を数多く取り込んで作られている。『蘆屋道満大内鑑』を信田妻の伝承の集大成と言うなら、『信田森女占』は狐の伝承の集大成といった

趣がある。

以下、『信田森女占』において、狐の伝承との関連が見られる部分を確認していく。

まず、安名は自ら屋敷を出奔し、信太の森で狐に化かされている。

- ・嫡子の安名かりそめにやかたをしのび出給ひ。二度歸りたまはねば
- ・母上も腰元侍一同に。忽ちやかんの姿と成て行よと思へばふしぎやな。山立替るしのだの森五ツの社と成にけり。
- ・安名あたりを見まはし某程の侍が。扱は狐にばかされしと。もくねん。としていたりけり。⁽⁴⁾

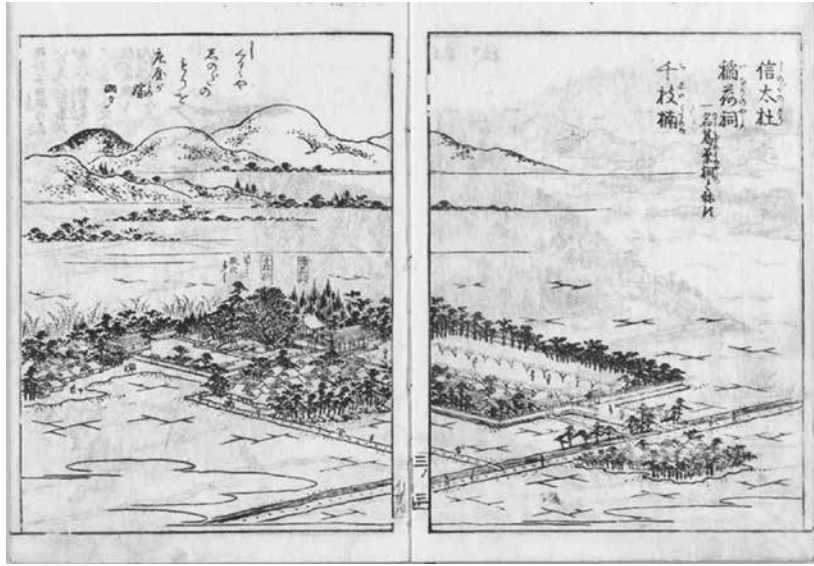
ここでは「母上」「腰元」「侍」が一斉に野干すなわち狐の姿になっており、狐集団が揃って人間に姿を変えていたことになっている。こうした設定は、『今昔物語集』巻十六「備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七」や御伽草子『狐草子』に通じるものである。この二作については次節で述べる。

『信田森女占』はその題名にも明らかのように、信太の森周辺を主な舞台としている。このあたりに狐が多く住んでいたことは、『和泉名所図会』巻三（秋里籬島、寛政八年1796刊）の「信太杜」に

信太杜

信太郷中村の荘頭森田氏の宅地にあり。信太杜より十町許西也。いにしへは森の封境廣大なり。今は農家建ならひて、かの居地に方廿間許なる森ありて、草木繁茂し、尋常の叢林なり。稲荷祠あり。奥に白狐祠あり。林中に狐穴多し。⁽⁵⁾

とあり、さらに、「信太杜」「稲荷祠」の画に「稲荷祠 一名葛葉祠と称す」「此ほとりに狐穴多し」という記述が付されていることから確認できる（図版1）。信太の森に狐が多く棲んでいること、その中に人間の女房になった葛の葉がいたことは当時広く共有されていた知識であり、狐集団の世



図版 1

界の存在を思いなさせる前提となっている。⁽⁶⁾

また、『信田森女占』は、玉藻前の伝説を踏まえている。安名を助けた「六尺ゆたかの大男」が次のような台詞を言う。

・前世は。天竺にてはんぞく王の墓の相手茶坊主のこんくわい。大たうにてはゆう王の悪性宿菊島めうぶの介。我朝糸来ツては玉もの前の長刀持。焼鼠の源九郎

この男は「玉もの前の長刀持」をしている狐という設定なのである。玉藻前は、謡曲「殺生石」によってその伝説が広く知られた金毛九尾の妖狐である。玉藻前の概要を記す。

伝説上の美女。鳥羽法皇の寵姫玉藻前は、天竺と中国において、姪酒によって王を蕩し、すこぶる残虐な所業や悪の限りをつくした果てに、日本に飛来した金毛九尾の狐の化身であった。この妖狐は、陰陽師安倍泰成に正体を見破られ、那須野に逃げるが射殺され、その霊は石と化して近寄る人や鳥獣を殺す殺生石になったという。[中山 幹雄]⁽⁷⁾

謡曲「殺生石」では、那須野にある生き物が近づくと死ぬという殺生石が、かつて天竺から唐を

経て日本に渡来して玉藻前となった金毛九尾の妖狐が安倍泰成に正体を見破られ、射殺されて石と化したものである、と語られる。

本作の狐女房は玉藻前と直接関係するものではなく、また、物語の筋も玉藻前の伝承と結び付けられるものではないが、狐の集団の中に玉藻前に縁あるものがいるとすることで、金毛九尾の妖狐の伝承を想起させている。

この男については次のような記述もある。

・かの者あたりを見まはしてア、ヲうれしや頼もしや。安名に命たすけられ。今又安名をたすけつ。 (中略) しどろもどろの。我姿。もと住宿の草村に入て。形は失にけり。

男の台詞には、「大男」が安名を助けたのはかつて助けられた恩を返すためであることが説明されている。人間に恩を受けた狐が女に姿を変えてその人の妻となるという狐女房の報恩譚ではないが、狐の報恩を取り込んだものである。また、「もと住宿の草村に入て。形は失にけり」という表現から、このあたりに人間の目に触れず狐集団が暮らす狐の世界が存在していることが想定されると読み取れる。

- ・私はせつ生をこのみ。狐をつることゑております。
- ・是々源五狐をつるわなとやらいふ物をついにみたことはないが。どのやうな物ぞ。其わなとやらちとみたいの。
- ・くずのはにほひに心ひかされおも色かはり尾を出し。覚ずついてまはりしは浅ましかりし有様也。

葛の葉を怪しんだ人々は狐を釣る罟によってその正体を確かめようとする。葛の葉は道満との対決に勝ちながら、狐の浅ましきから鼠の油揚げの匂いにひかれ、狐の正体を現してしまう。この場面は、獵師に狐を捕らえる罟を捨てさせようと獵師の伯父の白蔵主に化けた老狐が、獵師の説得に成功しながら、その帰り道に狐の罟にしかけた鼠の油揚げに誘惑されるという狂言「釣狐」を利用したものである。老狐が獵師を説得しようとしたのは、一族の狐が次々と獵師に捕らえられたためであり、やはり集団で暮らす狐の世界が想定されている。また、白蔵主（老狐）は獵師に玉藻前の物語を語っている。狐にまつわる物語はこのように広まり、狐たちの世界の想定が成立していく。『信田森女占』はこのような狐の物語、狐の世界を継承しているのである。

このように、『信田森女占』は、狐女房の伝承にとどまらず、広く狐の伝承や俗信を取り込んで組み立てられている。このことは、翻ってみれば、信田妻の伝承の集大成とされる『芦屋道満大内鑑』がこうした多様な狐の伝承を切り捨てて成立している作であるということを示していよう。

三 『今昔物語集』『狐草子』の狐女房

信田妻の伝承を集大成したとされる『芦屋道満大内鑑』と狐の説話を綴り合わせて作られている『信田妻女占』を、「異界」である狐の世界との交流という観点からみると、『信田森女占』は安名が狐に化かされて狐の世界に入り込んでいること、また、集団で暮らす狐の世界の存在が背後に想定

されていることが浮かび上がってくる。

狐に化かされて狐の集団が暮らす狐の世界に入り込み、そこで人間に姿を変えた狐を妻として暮らす物語と言えば、先に触れた『今昔物語集』巻十六の賀陽良藤の話や御伽草子『狐草子』を挙げることができる。いずれも男（良藤、僧都）が狐に化かされて、狐を人と思ひ込んでともに暮らす話であり、『狐草子』には『今昔物語集』の影響が指摘されている⁽⁸⁾。ここで注目したいのは、男が入り込んでしまった狐の世界がどのようなところであったかという点である。化かされていたことが明らかになった場面をそれぞれ次に引用する。

- ・人ヲ以テ蔵ノ下ヲ令見レバ、多ク狐有テ、逃テ走り散ニケリ。
 - ・良藤倉ノ下ニ居テ十三日也。而ルニ、良藤十三年ト思エケリ。
 - ・亦、倉ノ桁ノ下纒ニ四五寸許也。
（『今昔物語集』巻十六「備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七」）⁽⁹⁾
 - ・もんのかたに人のあまたをとしければ見やりたるに、わかき僧のしやくちやうをもちたるか、三四人はしりいたり。これを見て、あるしの女はうをはしめてありつる物とも、われさきにとにけはしる。さうづあさましくて、にくる人々を見れば、老たるもわかきもきつねになりて、みな四はうへはしりうせにけり。
 - ・そうつはゆめかうつつか、さてもわかみはねたりやねずやなとおもひ、いゑのうちをみまはせは、こんかうしやういんの大廊かのしたなり。みすやたゝみとおもひしは、むしろこもきれなり。
 - ・七ねんかほとのとのしみは、七日うちにてぞありける。
- （『狐草子』土佐光信画 守純（写）嘉永二年（1849））⁽¹⁰⁾

両者には共通する点がある。人間に化けていた

狐が複数存在していて、正体が露見すると四方へ走り逃げていること、また、男がいた場所が倉の下や大廊下の下という狭い空間だったという点である。『今昔物語集』では、「倉ノ桁ノ下纒二四五寸許」ときわめて狭い場所であったことが明示されている。『狐草子』の本文では「大廊かのした」とあるだけだが、絵を見ると縁の下の狭い空間であることがわかる（図版2）。その前の場面の絵には、縁の下の狭い空間を立派な屋敷の室内と思って楽しんでいた様子、人間に化けて仕えていた狐たちが正体を現して走り逃げる様子が描かれており、男が入り込んでしまった狐の世界を窺い知ることができる（図版3）。

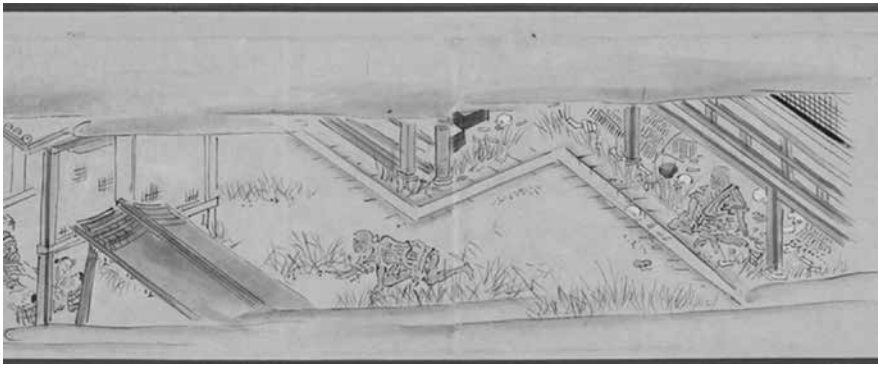
さらに、良藤が十三年と思っていた時間は実は十三日だった、僧都が七年と思っていた時間は実は七日だったとされる。狐の世界と人の世界で時間の流れ方が異なっているという認識の表れであ

る。異界での時間の流れが人間世界のそれと異なるのは、浦島太郎（浦嶋子）なども同じであるが、浦島太郎の場合は、竜宮で過ごしたと思った時間よりはるかに長い時間が人の世界で流れていた。良藤や僧都の体験した狐の世界はこれと逆で、狐の世界で過ごしたと思った時間が人の世界ではずっと短い時間であった。

狐の世界の空間と時間は、人の世界と異なるものとして認識されているのである。

四 信田妻における時間と空間

本節では、『芦屋道満大内鑑』成立以前の信田妻の伝承の物語における狐の世界と人の世界の交わり方を時間と空間に着目しながら見ていく。具体的には、『芦屋道満大内鑑』に影響を与えたと考えられる『篋篋抄』『安倍晴明物語』『しのだづまつりぎつね付あべノ清明出生』、そして『信田



図版2



図版3

森女占』『芦屋道満大内鑑』を比較検討する。

『篋篋抄』は日時や方角の吉凶などを大成した雑書で、『篋篋内伝』『金烏玉兎集』とも呼ばれる。安倍清明撰に仮託されているが、鎌倉時代以降の成立と考えられ、撰者は不詳。寛永六年（1629）、正保四年（1647）の刊本が現存する。

この書には、安倍清明の出生と母について次のような記述がある。

彼清明ガ母ハ化来ノ人也（中略）猫嶋ニテ或人ニ被留、三年滞留有間ニ、今ノ清明誕生有。既ニ童子三歳之暮、歌ヲ一首連ネ給曰、恋クハ尋ネ来テ見ヨ和泉ナルシノダノ森ノウラミ葛ノ葉ト読給テ攫消様ニ失ニケリ⁽¹¹⁾

これによれば、安倍清明の母は化生の者であり、信太でなく猫島⁽¹²⁾で「或人」と暮らして童子をもうけ、三歳までの三年間を過ごしたとされる。母の残した和歌は『芦屋道満大内鑑』でよく知られるものと同じであり、母が信太の森の狐であったことを暗示しているが、その名前は明らかでなく、清明の父の名も記されない。また、後に清明は蛇を助けて竜宮へ行き、四寸の石の匣と鳥薬を授かっている。

次に、寛文二年（1662）、延享二年（1745）の刊本がある浅井了意作の仮名草子『安倍清明物語』から、狐の世界との交流が読み取れる箇所を引用する。文意を明確にするため、筆者（加藤）がカッコ内に言葉を補っている。

・安倍の安名といふ人、耕作して身の業とす。いづくともしらず、眉目よきわかい女房一人きたつて、われ此家に来る事はねがはくは君と夫婦のちぎりを結び、もろ友に住侍らんと思ふなりといふ。

・（童子は）すでに三ざいと申す。夏のころ母一首の歌を障子にかきつけける。

恋しくはたつね来て見よ和泉なる篠田の森のしのびへに

とかきをきて行方しらずうせにけり。

・これは篠田のきつねのわが妻となりつゝ立

ち出て帰りし跡にて

・（竜宮の）門より外にあゆみ行事口町はかりとおほえて、安倍野ちかくぞ出たりける。⁽¹³⁾

ここでは、安倍安名の元はどこからともなく女が現れて安名と夫婦になり、子供をもうけて三年共に過ごした後、女は狐の正体を明かして信太の森へ帰って行く。また、この物語にも清明が竜宮世界から秘符と輝く玉を入手する話があるが、竜宮の門から数町ほどと思ったところが安倍野（阿倍野）近くであったとされ、信太の森周辺が物語の舞台であること、竜宮という異界と人間世界の臃げな距離感が表されている。なお、この物語は、子供の母の狐は信太明神であり、かつ吉備大臣であるとしている。

次に挙げるのは、延宝二年（1674）刊、古浄瑠璃『しのだづまつりぎつね付あべノ清明出生』（以下、『しのだづま』）である。

・みづからか、すみあらしたるいほりのあれは、まつ是へ立よらせ給ひて、つかれをはらさせ給ふべし

・女房、よのつねの人ならず、しのだの、やかん也しか、やすなに命たすけられ、其ほうをんのため、人がいにましはり、はや七とせになりける⁽¹⁴⁾

ここでは、女が信太の狐であり、安名に命を助けられた恩を返すため人間の交わりをしたとされている。安名が狐の世界に入り込んだのではなく、狐が人の世界に出てきたのである。そのため、二人の出会いの場面では女が安名を自分の庵に招じ入れている。二人は七年の時を過ごしているが、女の名前は明らかでない。

続いて、先に見た紀海音作の人形浄瑠璃『信田森女占』を時間と空間の観点から再度検討してみる。

・母上も腰元侍一同に。忽ちやかんの姿と成て行よと思へばふしぎやな。山立替るしのだの森五ツの社と成にけり。

・安名様にも年月の世を牛滝の片ほとりに。

ひそかにしのびおわします此子をつれて尋ね行。わらはがうき身をはなしてたべ。

・りんとしたきを持ならひ七ツにもなりたらば。よみかきに心をいれ。安倍の御名をあげて。目出度く月日をくらせよとすがり。付てぞ。泣給ふ。(中略)何をいふてもおしへても東西わかぬみどり子を。めんどうながら頼みます

一番目の引用は先に掲げたものと重複するが、ここに表れている「母上も腰元侍一同に」という狐の集団は、『篋篋抄』『安倍清明物語』『しのだづま』には見られないものである。「しのだの森」「牛滝」の地名が明示する通り、物語は信太の森周辺を舞台としている。『和泉名所図会』で見たように信太の森が実際に狐の多いことで知られる場所であったことを考えると、物語の背景に狐たちの世界を想定するのは自然な発想と思えるが、一方で『篋篋抄』『安倍清明物語』『しのだづま』にはそうした設定がないことから、この作品の狐の世界は『今昔物語集』や『狐草子』の延長線上にあると言える。また、葛の葉は安名と暮らして三年で「みどり子」の童子と別れることになるが、その際「七ツにもなりたらば」と七歳になった時の将来の童子を思い描いている。

最後に、『芦屋道満大内鑑』についても同様の

観点から検討しておく。

・老人夫婦の旅姿廿余りにおとなびて。娘めく人かいはうし

・よくへ思へばわかれて早六年。長の年月生_キ死の問おとづれもせず。

・此所の住居ははや五年。安倍の童子と申_ス五さいの男子をもうけ⁽¹⁵⁾

一・二番目の引用は、本物の葛の葉姫と両親が行方不明の保名の居所を尋ね当ててやって来た場面である。葛の葉は「廿余りにおとなびて」おり、保名が生死不明のまま六年の年月が経ったことが語られている。三番目は狐葛の葉の台詞で、保名と共に五年の歳月を過ごし、童子は五歳になっていることが分かる。ここで注目されるのは、狐葛の葉と保名が暮らした狐の世界と葛の葉姫が暮らしていた人の世界とで、並行して同じ歳月が流れていることである。

以上の内容を中心とした各作品の比較対照表を掲げておく。(表1)

五 狐の世界と人の世界

最後に、これまで見てきた狐女房の物語を踏まえた上で、『芦屋道満大内鑑』の狐の世界と人の世界の「接点」を指摘したい。

『篋篋抄』『安倍清明物語』『しのだづま』では、

表1

	二人の 名前	狐の 報恩	正体が発覚 する理由	時間	場所	その他の特色
篋篋抄		×	ナシ	三年		蛇を助けて竜宮へ 重宝の四寸の石の匣・烏葉
安倍清明物語	安名	×	ナシ	七年	信太近く	竜宮世界の秘符・輝く玉 母=信太明神=吉備大臣
しのだづま	やすな 女房	○	童子目撃	三年	安名住家 (安倍野)	蛇を助けて竜宮へ 龍王の秘符・一青丸
信田森女占	安名 葛の葉	△	他人目撃	三年	信太社 牛滝	葛の葉が占方をする 竜宮世界の秘符・名玉
芦屋道満大内鑑	保名 葛の葉	○	本物登場	五年	阿倍野	

女は信太の森の狐であるが「葛の葉」という名前が見えない。これらの作品は、狐葛の葉の伝承より安倍晴明の出生譚という性格が強いことが分かる。そのため、出生譚の性格をより強く持つ『簠簋抄』では信太以外の場所で二人が出会い、暮らしている。

狐が恩返しのために人の姿に変わって妻となるという報恩譚の型を持つのは『しのだづま』『芦屋道満大内鑑』のみである。

『信田森女占』は、安名が狐に化かされ、狐たちが集団で暮らす狐の世界が前提とされており、これは『今昔物語集』「備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語」、『狐草子』と共通するが、他の作品にはそうした内容が見当たらない。

保名（安名、やすな）が狐女房と暮らした年月は、三年、五年、七年とされる。『信田森女占』では葛の葉が三歳で別れる童子の行く未七歳の頃を思う場面があり、『芦屋道満大内鑑』では保名と狐葛の葉が暮らした五年の年月と並行して、本物の葛の葉姫にも同じ時間が流れている。四段目「保名住家の段」で葛の葉姫が登場する際の「廿余りにおとなびて」の描写と演出について、内山美樹子氏は、

娘にしてはやや老けた感じをいう。現行ではこの句を省き葛の葉姫は二段目と同じく緋の振袖着付、白地の帯。十代の姫の拵え。若い扮装は初演時も同様か。⁽¹⁶⁾

と指摘している。結婚適齢期の若い娘が行方不明の婚約者を六年探し続けていたこと、その娘が保名と夫婦になって五歳の子供を持つ狐葛の葉と瓜二つであることは、現実的な解釈上も人形の演出上もやや無理があると考えられるところである。『芦屋道満大内鑑』においては、狐葛の葉と葛の葉姫とに同じ速さで時間が流れていることで物語世界内部の整合性に軋みが生じているのである。主人公が狐に化かされた『今昔物語集』『狐草子』で狐の世界と人の世界で時間の流れ方が異なっていたこと、『信田森女占』が集大成してい

た多様な狐の伝承を『芦屋道満大内鑑』は切り捨てていたことを勘案すると、『芦屋道満大内鑑』は、狐女房という狐の世界と人の世界の物語に近世浄瑠璃の合理的な筋立てを持ち込んで物語を再構成した作と見ることができよう。『芦屋道満大内鑑』「保名住家の段」の狐葛の葉と葛の葉姫の出会いにおける軋みは、それが狐の世界と人の世界の「接点」であったことの現れなのである。

【注】

- (1) 『新版 日本架空伝承人名事典』（平凡社、2012）
- (2) 『新版 歌舞伎事典』（平凡社、2011）
- (3) 「信太妻の話」（『折口信夫全集 2』（中央公論社、1995）初出は『三田評論』320・322・323（慶應義塾大学、1924）
- (4) 『信田森女占』の引用はすべて『紀海音全集』第一巻（清文堂出版、1977）による。
- (5) 『和泉名所図会』のテキストおよび絵画部分（図版1）の引用は、国立国会図書館デジタルコレクション（請求記号：839-79 書誌ID：000007276087）による。
- (6) 信太の森の葛の葉の伝承を族外婚（エグゾガミー exogamy）の物語とする解釈があるが、警女唄「葛の葉子別れ」をモチーフとした秋元松代の『元禄港歌』（1980初演）はその系譜の作といえる。
- (7) 『新版 日本架空伝承人名事典』（平凡社、2012）
- (8) 小松和彦『異界と日本人』（角川書店、2015）
- (9) 引用は、新編日本古典文学全集『今昔物語集』（小学館、2000）による。
- (10) 『狐草子』のテキストおよび絵画部分（図版2・3）の引用は、早稲田大学図書館蔵本（請求記号：へ12 01586）による。
- (11) 引用は、正保四年刊本である名古屋大学附属図書館神宮皇學館文庫蔵本（請求記号：176.8H）による。
- (12) 常陸国猫島村。安倍晴明が住んだという伝承がある。
- (13) 引用は、延享二年（1745）刊本である早稲田大学図書館蔵本（請求記号：へ13 02506）による。
- (14) 引用は『古浄瑠璃正本集』第四（角川書店、1965）による。
- (15) 引用は、新日本古典文学大系『竹田出雲 並木宗輔浄瑠璃集』（岩波書店、1991）による。
- (16) 新日本古典文学大系『竹田出雲 並木宗輔浄瑠璃集』P.89脚注15。